

むかし、あるところに、金持ちの若い夫婦が住んでいました。おかみさんはめんどうくさがりで、お茶を飲んだら残った茶がらを、ご飯を食べたら食べ残しを、かまどの後ろに捨てました。すると、貧乏神がつけこんで、その家に入って来ました。そこで、家はだんだん貧乏になって、しまいには、どうにもこうにもしょうがなくなってしまいました。

ある年のこと、正月が近づいても、もちもつけません。はてどうしたものだろうかと思っ
ているうちに、とうとう大晦日おおみそかの晩になってしまいました。

男は、薪まきもないので、床板ゆかいたでも燃やそうと、床板をはいで、かまどで燃やしてあたって
いました。すると、奥のほうで、なにやらごそごそ音がしました。何かと知っている、しゃ
ぐまのようなぼさぼさ頭のじいさんが出て来ました。男が、

「おまえ、なんだ」というと、じいさんは、

「わしは、貧乏神だ」といいました。男は、燃えている床板でじいさんをなぐろうとしまし
た。すると、じいさんは、

「わしも火にあたらせてくれ」といって、すわって火にあたりだしました。そして、

「わしがこの家に来てもう八年になる。今では家の中には何もなくなってしまった。おまえ
のおかみさんは、かまどの後ろへお茶のかすやご飯のかすを投げるから、わしは大好きだ。
それでこの家にいるのだ」と話しました。

それから、じいさんはいいました。

「おまえがもし金持ちになりたかったら、おかみさんをうちから追い出せ」

男は、その気になって、おかみさんを追い出してしまいました。

貧乏神は、男に、お金を渡して、

「町へ行って酒を一升しちゆう買ってこい」といいました。

「だが、徳利とっくりがない」と、男がいうと、

「唐津屋からつやへ行って買ってこい」といいました。男は、唐津屋へ行って徳利を買い、今度は酒
屋やへ行って酒を一升入れてもらいました。

男と貧乏神は、ふたりでお酒を飲みました。やがて、貧乏神がいました。

「今夜は、年の晩だから、前の道を殿さまがお通りになる。おかごに乗って、下に下にとい

つて来るから、おかごの中めがけて、なぐりこめ」

「そんな恐ろしいことはできるもんじゃやない」と、男がいうと、貧乏神は、

「それよりほかに、おまえの家が金持ちになる方法はないぞ。やってみろ」といいました。夜がふけると、男は、てんびんぼうをかまえて待つていました。すると、貧乏神のいったとおり、ちようちんをたくさんつけて、おかごがやって来ました。男は、おかごになぐりこもうと飛び出しましたが、まちがえて先ぶれの家来なまをなぐってしまいました。家来は、すぐにぼこつと死んでしまいました。おかごはまっすぐに道を通りすぎて行ってしまいました。死んだ先ぶれの家来は、よく見ると、銅貨どうかでした。

男がびっくりしていると、また貧乏神がやって来ていいました。

「おまえ、どうして殿さまのおかごをなぐらなかつたんだ。年が明けたら、もう一度だけおかが通るから、それめがけてなぐりこめ」

年が明けて、元日がんにっの晩になりました。男が家の前に出て待つていると、やっぱりちようちんをたくさんつけて、おかごがやって来ました。男は飛び出していつて、殿さまのおかごをなぐりつけました。すると、大きな音がして、何かがくずれました。見ると、かごの中から小判こばんがざくざくと出て来ました。

男は、また、昔のように金持ちになったということです。

村上郁再話

資料『香川県佐柳島・志々島昔話集』武田明／三省堂